

---

# 大日本帝国冷戦期

キプロス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大日本帝国冷戦期

### 【Nコード】

N7195M

### 【作者名】

キプロス

### 【あらすじ】

『米英戦争』と『レッド計画』続編。第4世代の戦闘機が空を駆り、第2世代の戦車が大地を闊歩する1970年代初頭の世界。国連安保理常任理事国やPATO（環太平洋条約機構）理事国として国際的に不動の地位につく戦勝国大日本帝国は、冷戦の最中で次なる戦火に巻き込まれていく事となる。

## プロローグ（前書き）

早くも続編を書かせて頂く事になったキプロスです。多々見苦しい点が多く、拙い文ではありますがよろしくお願い致します。

## プロローグ

1954年6月2日

リンカーン・タクシーの車窓から、東京の空を駆る六対の白筋が重なり合うようにして唐突にその姿を露にし、車内の男は渋い顔を浮かべた。

その70歳の男は組んでいた腕を解き、深い溜め息を吐きながら両手に握られたメモに目をやる。何も恐れる事は無い。戦争は11年前に決着が着いているのだから……。男は自分に言い聞かせ、再度外へと視線を向けた。

車が急に速度を落としていきなり左折し、何処かの建物か歩道に侵入したかのように、車体がフワリと上へ上がり、停車した。男は苦い表情を浮かべながら場の空気が変わった事に気付いて、現在地を知る為にうつむく視線を上げ、窓から外を見た。

車窓には、何かの軍事施設 恐らく飛行場が存在し、幾つかのVTO L輸送機や米軍直輸入の戦闘機の数々が悠然と滑走路の上に置かれている。

その最中、窓の開ける音がした。

「大統領、到着しました」

ダークスーツを着た、頭を剃り上げた白人が軍人のようなキビキビとした口調で告げた。

要らぬ不安を募らせつつ、男は聞き耳を立て、軍事基地へと足を踏み入れた。

突如、鳴り響くシャッター音。

外気を切り裂くその音と同時に、閃光が視界を遮り、男は瞬時に肩を上げて胸を張り上げ、笑顔を浮かべながら手を上げて足早に歩いた。アサヒフレックスを握りながら声を張り上げて男を取り囲む人衆は盛んに一言コメントをというフレーズばかりを口にした。

ローファーが舗装された地面を軽やかに踏み締める中、男は巨大な祭壇に昇り、置かれていたオーク材の革張り椅子に腰を下ろして気分を落ち着かせた。

「大統領、お越し頂き光栄です」

拙い英語で話し掛けるその男は、黒縁眼鏡に剃り上げられた頭という、日本人らしいパツとしない風貌をしており、70歳の男は当惑染みた表層を浮かべた。

「ミスター・ヨシダ。こちらこそ光栄だよ」

男は出来る限りの作り笑いをして見せ、眼鏡の男に右手を伸ばして握手を求めた。

眼鏡の男　吉田茂総理はトルーマン大統領の微妙な笑みから、胸倉を掴まれたような感触を覚えつつ、握手を果たした。

トルーマン・ドクトリンで名高いハリ・S・トルーマン大統領は、喉まで迫る違和感を覚えながら、新たなる世界の誕生に望もうとしていた。死・荒廃・再建と続く世界は今やソ連の脅威の中であり、リーダーたるアメリカはその態度を変えてはならない。

しかし、それも時には妥協せねばなるまい。

トルーマンはその事を胸に刻み、此処日本の大地に足を据えている。

「静粛に」

吉田茂は突如立ち上がり、マイクを手を取って告げた。胸と肩を竦めた後、瞬時に周囲を見渡して静かに頷いた。

「これより、PATOの調印発足式を開催致します」

PATO　環太平洋条約機構は、日本を中心にアメリカ・カナダ・中国・オーストラリア・タイ・フィリピン・ニュージーランド・カンボジア・インドネシアといった国々を含めた一大機構であり、大国としての地位を日本が見せる場でもある。

米英戦争後、マレンコフによる社会主義の拡大により生まれた冷

戦体制により、NATOが生まれていく中、戦勝国日本はアメリカに次ぎ2番目に原爆開発を成功させ、先進国としての地位を不動の物とし始めていた。そんな中で発足したのが、アジアにおける統一国家という考えであった。その足掛かりの一つがこのPATOであった。

リーダーであるのはアメリカではなく日本だったが、それがアメリカに言い様に使われる要因でもあり、その点に関しては断固たる姿勢を示さなければならぬと吉田茂は考えていた。

調印が終えられる中、賛辞の拍手が立ちあがる。

トルーマンは笑顔を見せて、シャッターを切る記者達にその顔を見せた。

天龍が空を駆る。

戦後、編成された日本空軍の曲芸飛行隊 『天龍隊』は大日本帝国の新鋭戦闘機『蒼狼』が空を切り裂き、白い尾を付けながら突き進む。

トルーマンは過小評価されている日本技術の現状を強く感じつつ、その光景を目に焼き付けていた。

この日を期に、平和と呼ばれる物は崩れようとしていた。

## プロローグ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 1話 戦後の足跡

発端は1945年。アメリカが原爆保有を表明した所から遡る。

日本はアメリカに遅れを取るまいと1948年に原爆開発を成功させ、翌年に保有を全世界に向けて発表。一方ソ連も次いで原爆保有を表明し、世界は核の時代の幕開けを告げる事となった。

1951年。日中戦争終結。親交の深い日本による威圧外交により、ソ連・アメリカによる補給路を絶たれた事。そして、マレンコフが拘束され、強制収容所に送り込まれた後、就任したフルシチョフの『スターリン批判』により、社会主義が否定された事を受けての中国共産党の内部分裂。『モスクワの嵐』作戦時に発展し、肥大化した大日本帝国諜報機関『大日本帝国情報局』による工作運動。さらには重慶に対する原爆投下未遂。これらの戦果はそれ程まで効果を発揮せず、最終的には講和となり、1948年から更なる激化を遂げた結果、陸軍の影響力は徐々に衰退していった。

陸軍衰退と技術革新を受け、1950年に大日本帝国空軍が設立される。

1945年。国連開設。常任理事国として日本も加入する。

一方、日本軍が駐留するフランス領仏印では、1947年に第一次インドシナ戦争が勃発。ホー・チ・ミンによるベトナム独立同盟は革命戦争を展開。OSSやソ連の支援を受けてのゲリラ戦により、フランス植民地軍を滅ぼし、ベトナム民主共和国を建国した。

1949年。北大西洋条約機構『NATO』結成。イギリスも参入する。

1950年。フルシチョフのスターリン批判を受け、東ヨーロッパ各所で反ソ運動が激化。それが後の第一次日ソ危機にも繋がっている。

1955年。元英国領キプロスで戦闘行為（第一次日ソ危機）が勃発。米英戦争時に英国支配からの独立を名目に日本・ソ連が軍を駐留させて以来、島の西は日本軍。東はソ連軍による支配が続き、それに苛立ったキプロス生まれのギリシャ軍将校ゲオルギオス・グリヴァスらにより結成されたキプロス解放民族組織が両陣営の軍事基地に対し、テロ行為を起こす。巧妙な工作によって日本軍・ソ連軍両者とも解放組織の犯行と思わず、一時一触即発の状態に陥り、部分的な戦闘が繰り広げられたが、解放組織の犯行と発覚して数日後に停戦する。

第一次日ソ危機は、冷戦体制化の構図が色濃く反映し、同時にアジア・アフリカでの独立運動を誘発させ、同時に日本国内でも激しい自由民権運動が始まり、男女平等選挙の実現。憲法改正。軍備縮小。徴兵制撤廃等、戦時中に溜まった不満や怒りが爆発、一大論争が巻き上がった。陸軍の影響力の縮減や圧迫する軍事費。更には国連の結成が功を奏したのか1960年代頃には昭和天皇の勅令の下、憲法改正が決定される。

1956年。ソ連が世界初の人工衛星『スプートニク一号』を打ち上げた翌年、大日本空軍の下、人工衛星の打ち上げに成功する。開発には糸川英夫が携わり、アメリカではスプートニク・ショックと重ねて大きな反響を果たし、技術力で劣っているソ連と人種的に劣っている日本に負けた事から、政府や社会は混乱と憎悪に包まれた。

1954年。環太平洋条約機構（PATO）の結成を受け、ワルシャワ条約機構成立。世界は三大機構の下、動く事となり、冷戦体制もより色濃くなっていった。

1962年。バテイスタ政権を打倒したカストロはアメリカに経済援助支援を要求するが、大統領不在という手酷い仕打ちを受けた事からカストロは激怒。その結果として親密になったソ連に対してアメリカのキューバ侵攻防衛策として核ミサイルを配備する『アナデル計画』をカストロは承諾し、ソ連の貨物船が頻繁にキューバへと入るようになる。アメリカ空軍の偵察機は建設中のミサイル基地を発見し、ケネディ大統領はソ連に対するミサイル基地撤去を要求し始める。核戦争寸前という所にまで陥ったものの、フルシチョフは要求を呑み、ミサイル基地撤去を承認する。

その頃には、日本国内のICBMはソ連とアメリカに照準が合わせられていた。

## 1話 戦後の足跡（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 2話 ホアロー収容所

1971年6月20日 pm 22:48

ベトナム民主共和国ハノイ

ホアロー収容所後方500m地点

ダークグリーン色のバンの中で、わざと汚したシャツと擦り切れたズボンに身を包む40代位の黄色人の男が、挽きたてのハノイ産コーヒー豆から入れたブラックコーヒーを口に付け、その香りと苦味を楽しんでいた。隣には、しかめっ面の黒人とダークスーツに身を包んだ男が両耳にヘッドホンを押し当てて、外部からの連絡を聞いた。

「デルタ1-3。目標を確認出来たか？」

「視認出来るぞセイバー。日本兵は15…16…17…」

ヘッドホンから漏れ出すくもった音は次々と数を示していき、

ダークスーツの男は眉間を顰めた。

「攻撃要請。目標 - 日本陸軍五式中戦車6両」

「了解、対地攻撃機による地上制圧攻撃。約30秒後」

ダークスーツの男は無線機の周波数を変更し、収容所上空を飛行するAC-130Eへと連絡を取り始めた。

「こちらセイバー、目標は戦車6両。」

「了解」

AC-130Eは左舷へと大きく旋回し、ボフォース40mm機関砲の銃口を地上。悪名高き監獄、『ホアロー収容所』へと向けた。射撃手の兵士は大きく目を見開いて、照準を検問施設に点在する戦車に向けて合わせた。

その瞬間、収容所に爆発が巻き起こる。

バンの中、大きな振動を感じ取ったダークスーツの男は凄みのあ

る笑みを浮かべた。

「いいぞ、デルタ1-3。目標を確保しろ」

GPS受信機に映る目標座標を見据えつつ、ダークスーツの男は告げた。今夜、月明りに照らされた無粋な収容所は、瞬時に火の手に包まれる事だろう……。

ホアロー収容所は1896年にフランスによって建てられた収容所で、史実ではベトナム人民軍の捕虜収容施設だが、現在は日本軍の特別収容施設として、死刑囚や戦争犯罪者達が収監されている。施設内にはフランス時代の名残であるギロチンが残っていたりしており、史実上のベトナム戦争時では米軍捕虜も収容されている。施設からは毎夜、正体不明の叫び声や悲鳴が響き渡っている。

しかし、今夜はまた別の悲鳴が上がっていた。

施設正門付近、黒の迷彩服に身を包んだアメリカ人数人が付近に隠れ、突如起こった爆発に動揺していた。

その1人、ライアン・ホーソンはM16ライフルを握り締め、今まさにその燃え滾る収容所の中を走り抜けようとしていた。200mに及ぶ暗い車道を進み、湾曲した大日本帝国陸軍の五式中戦車の横を抜け、密閉され、停車する十式装甲輸送車の背部ドアを無理矢理こじ開けた。

中に居たのは、老いて痩せこけたロシア人。

みすばらしい囚人服に身を包むその男は、両手に重厚な手錠が掛かっており、目を丸くして唐突に現れたライアンの顔を見た。

「ヤーコフ・ジュガヴィリ？」

ライアンの問いに対し、老人は頷いた。

『デルタ1-3。脱出ヘリがそちらに向かっている』

耳に響く声を聞き、ライアンは酷く動揺した。早く連れ出さないと……。

数人の仲間とともに、ライアンは老人を連れて大地を駆ける。背

後からは甲高い日本語が轟き、時折銃弾が目の前を通り抜ける。

空をイロコイが駆ける。

アメリカ陸軍の凡用ヘリコプター『UH-1イロコイ』は漆黒の闇を回転翼で切り裂きながら、突き進んでいく。爆風が鬱蒼と茂る木々や家々に衝撃を与え、徐々に下降していった。

ライカミングターボシャフトが轟音を立てる中、ライアンは慌てながら老人をへりへと乗せ、機内へと搭乗する。

「全員乗った！出発しろ！」

イロコイは宙を舞い、轟音を放ちながら進み出す。

その背後では、ダークグリーンのバンがエンジンを立て、急速発進してその場から逃げ出していた。中に居たダークスーツの男は笑みを浮かべていた。

『こちらデルタ1-3。脱出成功』

「……了解。そのままトンキン湾に待機する空母『アメリカ』へ向かってくれ」

## 2話 ホアロー収容所（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

### 3話 傀儡ヤーク

1971年7月17日 pm 12:09  
アメリカ合衆国

バージニア州マクレーンに位置するアメリカ中央情報局の本部。<sup>C I A</sup>  
通称『ラングレー』は、大統領直轄の機関であるCIAの心臓部であり、その内部には複数の部門によって打ち分けられている。徹底した機密主義と対ソ日諜報活動の拠点として世界中から懐疑の念で見られる事も多いが、大半の職員はデスクワークが中心であり、諜報員はごく僅かしか居ない。

CIA 対外情報局東南アジア方面部に属するジェームズ・マシューは長い期間、ベトナムで対日諜報活動を続けていたがCIA長官に呼び出され、ラングレーへと赴く事となった。

ベトナムの蒸暑さに比べれば、バージニアの乾燥した暑さはマシューにとって何とも思えなかった。晴れ渡った空より燦々と降り注ぐ太陽光がダークスーツの表面に反射し、熱が肌へと伝わっていく。長い間続いたベトナムの暮らしと比べると変な気分だった。

……まあ、祖国に帰れたんだ。

時差にしても適応には時間が掛かるだろうが、それでもかまわなかった。肉体はベトナムのコカインを欲していたが、それも別の事で抑えればいい。

CIA長官のオフィス前。

扉の前には『ジョージ・H・W・ブッシュ』というネームプレート。  
ト。

何とも敵かな雰囲気漂う中、重厚な扉の取っ手を回し、開く。

「来たか……」

黒髪のダークスーツを着た中年の男。CIA長官だ。

「長官。何か御用で？」  
マシューの声を聞き、俯いていたブツシュは視線を上げて眼前の男の顔を一瞥する。いぶかしげな視線にマシューは嫌な感触を覚えた。

ジョージ・H・W・ブツシュ。

イギリス王室とも繋がりを持つという一族に生まれたブツシュは、事実上の第二次大戦時には太平洋戦線でアベンジャーパイロットとして華々しい戦果を上げている。しかし、幾度にも渡り日本軍の対空火炮によつて機を撃墜されているが、その度に奇跡と言える程味方に救出されている。

その後、下院議員を通じて共産党全国委員会委員長、アメリカ国連大使等の要職を歴任し、後に副大統領に就任。1988年の大統領選挙を勝って第41代大統領に就任した。

史実では、1976年にCIA長官に就任しているが、航空技術の発達した世界の中では、ジェット戦闘機『ライトニング』パイロットとして米英戦争中、カナダ戦線に参加。戦後は異例の出世を果たしており、1971年付けで長官職に就任している。

昨夜、耳に入った重要な案件の為、ブツシュはベトナム任務主任のマシューを呼び付けた。

「呼んだのは他でも無い……ヤークフについてだ」

ブツシュの言葉にマシューは当惑の表情を浮かべた。

「科学技術本部からの連絡で容態が完治したそうだ……」

「それは喜ばしい事ですな」

マシューは出来る限りの作り笑いを顔に浮かべて見せた。過去の遺物を再利用する気には到底なれないし、奴は腰抜けで指導者にはなれない。

「同時に、“Mkウルトラ計画”も順調に進んでいる」

不意にブツシュが発言した言葉を聞き、マシューはひどく動揺した。……なるほどな。

Mkウルトラ計画とは、1950年代初頭から開始されたCIAの洗脳実験のコードネームである。マインドコントロールによる人間の洗脳を研究し、人体実験を行っている。

現実には1960年代に中止されたが、この計画はある推論を元に継続していた。

それが『スターリン生存説』である。

1943年、日本軍空挺部隊が行った『モスクワの嵐作戦』は成功し、ゲオルギー・マレンコフらによってソ連は掌握された。日本は捕縛したスターリンを処刑したと言っているが、米国は長年の調査の結果、何処かに拘留している事を突き止めていた。

それが、ベトナムの『ホアロー収容所』である。

だが、調査の結果、スターリンは1958年に脳梗塞で死亡。計画の重要性は失われたかに見えたが、その収容所内に居る別の重要人物の存在に気が付き、計画は続行される。

その人物はヤーコフ・ジュガシヴィリ またの名を ヤーコフ・スターリン。ソ連の軍人であり、独裁者ヨシフ・スターリンの長男である。

フルシチョフ政権後、米国との友好政策や『スターリン批判』を受けてソ連国内では処刑されたスターリンこそが真の指導者であるという『スターリン崇拜』思想が誕生。その思想はフルシチョフが保守派により、書記長を失脚されて以降、更に強まっている。

CIAは洗脳したスターリンの息子、ヤーコフをソ連に帰す事でヤーコフを聖像として祭り上げさせ、将来は共産党中央委員会書記長に就任させ、裏でソ連を操るといふ計画を構想した。

そこで生まれたのが『Mkウルトラ計画』なのだ。

「ソ連人がヤーコフを認めますかね？」

「認めるさ……スターリン崇拜者共はヤーコフこそソ連のリーダーとして認めるはずだ」

ブツシュはそう言い、一息付いた。

「お笑いだが、ヤーコフは“自分がヤーコフに化けた”CIA諜報員、ステイプ・ウラジミールと思いこむ事になる」

「なるほど……」

マシューはCIAに畏怖感を覚えた。

「恐らく、すぐにスターリンを処刑した日本にソ連軍が強襲する事だろう……」

### 3話 傀儡ヤークロフ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 4話 Mkウルトラ計画

1971年8月18日Am01:25  
アメリカ合衆国

CIA科学技術本部部長のアシュリー・オサリバンは、徹底した官僚主義であるCIA内部の選り抜きとして、数年に渡り部長の椅子を保ち続けている。白衣を身に纏い、かなりの厚さを持つ鋼鉄製の扉に力を入れて開ける。

常に髪は束ね、薄化粧と威圧感溢れる風格を保ち続けている為、まるで軍人のような雰囲気を漂わせている。権威を疑う愚か者への警告の為、愛用の拳銃は肌身離さない。

下へ下へと続く階段は、米英戦争中の婦人陸軍部隊に居た際の力ナダの地下塹壕を思い出す。

オサリバンは手元に残ったM1ガーランドの感触を思い出しつつ、暗い足元に注意しながら下りていくと、不意に大型のエレベーターが姿を現した。古い白熱電球はショート寸前で、時折点灯し消滅という行動を続けていた。

エレベーターが音を立てて下へと到着すると、配下にある多数の研究員の姿が視界に映り込んだ。監視モニターと電話交換機の前に座る男達が軽く手を振り、オサリバンに挨拶する。

「部長！」

オサリバンはポケットに手を突っ込み、眼前の男性研究員を見据えた。「なんだ？」

「被験体25番が暴れています」

「またか……失禁や記憶喪失が酷かったからな……」

当惑した研究員に視線を向けつつ、オサリバンは考え込んだ。

「ミダゾラムを投与。駄目なら最終手段を」

オサリバンはそう告げながら、白い箱部屋の硬質ガラスに目をやり、クリップボードに被験体の状況を書き綴る研究員の肩越しに覗き込んだ。

被験体52番 愛称ウラジミール。

数ヶ月前に入ってきた60代のソ連人で、運ばれてきた当初は栄養失調から死に掛けていた。右肘の傷から感染症を発病しており、それを完治させるのも大変だった。上層部は被験体52番を最重要実験体と指定しており、プロジェクトチームは24時間体制で監視8時間おきにLSDを投与している。

オサリバンは指で硬質ガラスを突くと、ウラジミールはやつれた顔を上げ、視線を向けた。

……さてさて、どうなるかな。

上層部は洗脳プログラムの中に『独裁者』『軍人』『愛国心』を要求している。スターリンのように狡猾でありながらも常に心はアメリカ。CIA諜報員と思わせ、軍人らしい統率力を求めている。しかし、それは難しいものだ。少し前、被験体であったフランク・オルスン博士はLSDの副作用から自身が迫害を受けていると思いつき、自殺した。

「気分はどうかウラジミール」

オサリバンは硬質ガラス越しに言ってみた。無論、返答は無い。軍人らしい部分を要求しているという所から、オサリバンはチームの主任となった。それは、彼女が婦人陸軍部隊の陸軍大佐であったからだ。カナダ戦線では『モグラ部隊』とも呼ばれる塹壕戦闘に特化した部隊を率いており、迫撃砲による砲撃支援はお手の物だった。

「黙ってないで、何か言ってくれないかな？」

オサリバンは起き上がった被験体52番の視線に胸騒ぎを覚えた。やはり早期洗脳は無理か。

……少なくとも、洗脳には一ヶ月は掛かりそうだ。

#### 4話 Mkウルトラ計画(後書き)

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 5話 ウォール街の諜報員

1971年8月19日 pm 12:37

アメリカ合衆国

ニューヨークマンハッタン島のロウアーマンハッタンに位置する細い通りこそ、世界経済の中心地ウォール街である。

先物取引会社のCEO、周藤啓次は諜報機関『大日本帝国情報局』の北米方面担当である。ダークスーツと長身の引き締まった体格は普段、ウォール街にたむろしているビジネスマン達とは逸している。彼の隣には先月異動してきた情報局諜報員保坂がいる。2人はベンチに腰掛け、プラスチック製のコーヒークップ片手に人混みの中で堂々と話している。

「ヨーロッパはどうだった？」

「どうもこうも……私はベルギー軍を盗聴してただけですよ。これからどうすれば……」

気を落とす保坂の腰を周藤は叩いて励ました。周藤自身も、足が着いていない気分だった。数年前まで、5年以上もソ連で諜報活動を行っていた。7地方の訛りを使ったロシア語が話せて、昨夜はベラルーシ語訛りの夫婦の怒鳴り声でベッドに着き、翌日からの盗聴に備えていたのに……いまは企業戦士達に肩を並べて拙い英語を話しているのだ。

「まあ最初はつらいさ。時差や言語や……ジャンクフードとかな」  
周藤は笑みを漏らしながら言った。

「ところで何の用だ？」

「はい……ホアロー収容所の事はご存知で？」

無論知っている。と周藤は思った。アクセス・レベルが低いので  
全容までは知らないが……。

「そこである囚人がCIAに確保されたとの事で」

そういう事か……。翌朝、セントラルパークでジョギングをして帰ってから諜報員の接触を知らされた時から、妙な胸騒ぎを覚えていた。凄惨な事件と株価の書かれた新聞をブラックコーヒー片手に飲んでから会社に出勤するといういつも通りの日では無いらしい。

「了解した。後日連絡をくれ」

周藤はベンチから腰を上げ、コーヒークップをゴミ箱に投げ入れた。そのしなやかな体格は40代とは思えないものだった。

「周藤さん。どこに？」

「……昼休みが終わったんだよ」

1971年8月20日pm15:08

キプロス島

米英戦争中、イギリス領であったキプロスには民族解放と称して大日本帝国軍とソ連軍が上陸。制圧した。それから時は過ぎ戦後、未だ情勢不安定と植民地関係上から両軍は撤退の意思を見せず、キプロス島はそれまで続いていた民族問題を背景に『南キプロス』と『北キプロス』に分かれた。南は日本。北はソ連が支援を口実に軍隊を駐屯させている。

両国の形態の異なる経済やその軍事関係からしばし冷戦構造の象徴となっており、『地中海の壁』とも称される。

南キプロスは戦後、復活した資本主義構造下によって稀に見る経済発展を遂げた大日本帝国による指導の下、ヨーロッパ各国と形式上友好的なアメリカの協力を受けて経済は発展。特に輸送業は飛躍的発展を果たしており、娯楽施設や自由もある為比較的優れた経済下にある。

一方、ソ連下の北キプロスは工業化。娯楽施設は全く無く、自由も奪われた事から経済は破滅的状況下にあり、まるで掃き溜めのよ

うな環境だ。

島中央には大日本帝国とソ連によって造られた国境界線『グリーンライン』が存在している。

グリーンラインはコンクリート壁から始まり、有刺鉄線・地雷原・監視施設・対空対戦車兵器から成り立っており、キプロス島の広大な領土を双方がカバーする為、随時パトロールを続けている。

そのグリーンラインには首都ニコシアも含まれており、現実の東西ベルリンさながらの資本主義対社会主義構造が生まれている。無論、ベルリンの壁はグリーンラインが担っており、西ベルリンのように北キプロスの人々は南キプロスを『資本主義のシヨーウィンドウ』のように見ているのだ。

大日本帝国陸軍第29軍。

第70旅団の稲辺博明陸軍大尉は世界初の攻撃ヘリ『雄鷹』パイロットとして、ストロヴオロス陸軍基地より発進した。『雄鷹』の涙腺状の体躯が日光に輝き、空を舞う。

『……ストロヴオロス陸軍基地。異常は無いか？』

「異常は無い。目標地点ニコシアのグリーンライン到着まで3分」無線機越しに響く冷たげな機械音を聞き、ヘルメットに内臓された無線越しに稲辺は返答した。

2分後、稲辺の視界に首都ニコシアの街影が流れ込んで来た。横へ目をやり、広がるグリーンラインの対戦車壕とコンクリート壁に視線を向けた。

『……ヴオロス……基地……』

使えない無線機だな……。

稲辺はヘルメットを叩きながら悪態を吐き、コックピットより周りを見渡した。

1つの光源。

北キプロスより徐々に近付いてくるそれを見て、稲辺は嫌な予感がした。何だあれは……。

真正面に聳える聖ソフィア大聖堂に重なるようにして視界に映る光源はへり上部に直撃し、稲辺は激しい轟きを感じた。刹那、警告音が鳴り響いた。

下に広がる街々が近づくにつれ 稲辺の恐怖の色は強まる。

そして 堕ちた。

## 5話 ウォール街の諜報員（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

## 最終話 目覚めの時

1971年10月

キプロス島の一件後、大日本帝国とソ連は激しい摩擦を生じるようになった。北キプロスから放たれた対空兵器が陸軍のヘリを撃墜した為だ。南キプロス側と北キプロス側は臨戦態勢を図り、グリーンラインには無数の兵力が展開し始めた。

ソ連政府は、頑なに攻撃を否定したが、日本側としては聞く訳にはいかなかった。

両国の弾道ミサイルは双方に向けられ、アメリカも両国に照準をセット。非常に優れない状況である。

「……遂に始まったな」

そう言ったのは、CIA長官のブッシュ。ラングレーの長官室のデスクに腰を下ろし、テレビ画面に視線を向けていた。

その隣には、諜報員のマシュー。

「君には……ソ連に行って貰いたい」

「本当ですか？ベトナムから帰ってきたばかりですよ」

マシューの言葉に、ブッシュは顔を顰めた。

「祖国に忠誠を誓ったのだろうか？なら立派に果たせ」

マシューは洗面を作った。

「大事な積荷をソ連に送ればいいだけだ」

「積荷……ですか？」

「そうだ、大事な積荷だ」

地下施設の湿気の中で、CIA科学技術本部部長のアシユリー・オサリバンは汗が背中を流れ落ちるのを感じた。クリップボードを左手で握る感触以外、残りの全神経は、1つの中型の箱部屋の中を晒す硬質ガラスに向けられていた。

大事な積荷。

被験体52番……ウラジミール。

最近、口数が増えてきた事に対し、オサリバンは淡い期待を覚えていた。これなら、上のお望み通り、事を進められるだろう。

目覚めの時は近い。

冷戦は終わりを告げ、実戦が始まる。

日本やソ連、アメリカを含めた絶え間無き戦争。それが始まれば、一度世界は核の灰に包まれてしまうことさえありえるであろう。

ソ連内ではスターリン崇拜が強まり、傀儡ヤークフがやって来れば、その主導権をアメリカが握る事さえ可能だ。そんな事を大日本帝国はまだ知らず、激しい戦争の中へとただ身を任すしかない。

目覚めの時は始まった。

ゆっくりと……、その重く閉じられた目蓋は開いていく。

4対の光。

スターリンの息子、ヤーコフはそれを見た。

完

## 最終話 目覚めの時（後書き）

早々ですが、完結させました。冷戦期は第1部のようなものとし、続話は第2部として書いていきたいと思っています。とは言え、まだ物語がまとまっていないので、大分先になるとは思いますが、最後に読者の皆様、愛読して頂き、本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7195m/>

---

大日本帝国冷戦期

2011年5月18日06時27分発行